I—2　日本の伝説——救い主としての来訪者

カーメン・ブラッカー

このたび、国際日本文化研究センター主催の公開講演会「世界の中の日本」にお招き下さいましたことを心から光栄に思い、感謝致しております。日文研からのご招待を頂きましたとき、「世界の中の日本」にふさわしい話題を、いくつか思い浮かべました。いろいろなお話ができるのではないだろうかと考えましたが、どれに焦点を絞るべきか、決めかねておりました。その時、ふと浮かんで参りました主題は、私がこのところ関心を抱いて研究してまいりましたもので、それは、日本のフォークロア、つまり民間伝承や日本の各地の伝統の中にしばしば登場してまいります、「来訪者」あるいは「異人」のイメージに関するものです。この「来訪者」は日本全国津々浦々、どこにでもあります「伝説」または地方の民間伝承に、数限りなく見うけられるのです。

来訪者と申しますのは、「アウトサイド」すなわち神秘に満ちた未知の世界から、私たちが普段生活しております世界あるいは村落へ、いうなれば見聞きしたこともないような世界から訪ねて来る原型的な人物像のことをいいます。この点で、「インサイド」とは、私たちにとって、なじみの深い日常生活の世界であります。そこには、人々が共有している様々な人間関係や決まりごとがあり、その社会はそれらのネットワークによって構成されているのです。従いまして、来訪者たちが、外の世界から内の世界へとやってきましても、内の世界の様々なネットワークの中に入り込むことはなかなか難しいのです。ましてや来訪者たちは、私たちの世界の人々との間に、兄弟や義兄弟、いとこなどの関係があるはずはありません。来訪者たちが、内の世界に、彼らにふさわしい地位をあたえられることなどできるはずもないのです。といいますのも、彼らは、いつになっても外の世界に位置付けられるものでしかないからです。このために、来訪者たちは、私たちの世界においては、どのような権利や義務も与えられないのです。いわば、彼らは、私たちの世界では「主人も親類縁者ももたない」人たちなのです。

さらに申しますと、彼らはまた同時に、知られざる外の空間からの来訪者でありますので、そのために、現実的な感覚からすれば想像もできないような人々であります。この私たちの世界の境界の向こう側には、「外の世界」がありまして、エドワード・サーイードは、それを「想像の地理学」と呼びました。私たちは、その「想像の地理学」に、私たち自身の空想の世界で作り上げた、様々なファンタジーやフィクションを結び付けようとするのです。私たちは、この考えられもしない、明確な形ではとらえられない空想の世界の中に、天国でしか経験できないような喜びや、地獄のようなおそろしい社会があるのではないかと連想したりするのです。したがって、このような不思議な世界から、まさに私たちのただ中にやってきます来訪者は、私たちの文化が想像の世界に作りあげましたファンタジー（空想の世界）の様相をおのずから帯びたもの、と考えることができます。

ところで、どのような文化にもたいていは、このような来訪者をいいあらわす言葉があるようです。それらの言葉のどれをみましても、来訪者は「私たち」とは正反対の「彼ら」という視点で捉えられているといえましょう。ギリシア人は、いくつもの「外の世界」を想像し

ていましたが、そのうちどの「外の世界」から来ているのかという、自分たちとの隔たりの程度によって、来訪者を「クセノイ」とか「バルバロイ」と呼びました。日本では、来訪者を示す言葉には、「よそもの」とか、外の人を意味する「外人」、または種類の異なった人を意味する「異人」などがあるようです。

日本では、文化史家や宗教学者が、ここ五年ほどの間、「異人」像に焦点を当てた研究を次々と発表してきました。その意味で、来訪者を取り上げて議論することは、今日的にも非常に意味のあるものと考えております。「異人」に関する研究については、実は一九八五年以前には、さほど多くの論文も書かれていなかったようです。ただし、この「異人」像については、岡正雄氏がすでに一九二八年に論文を書いておられます。岡氏は「異人その他」と題する論文で、「異人」という言葉を超自然的な存在も含めて、非常に広い範囲の意味に用いておられます。八〇年代の初めには、人類学者吉田禎吾教授の著名な研究が出ております。吉田教授は、「異人」という言葉の意味は非常に広範多岐にわたり、しかもまた非常に曖昧であると指摘されました。吉田教授の定義によりますと、「異人」の語は、まったく正反対の二つの対照的な観念をふくんでいることになります。

しかし、ここ五年ほどの間に、この「異人」像をめぐる主題は、日本の社会の中で、突然勢いを得、このテーマに関連した著作や論文が次々と刊行されました。一九八五年には、赤坂憲雄氏によって『異人論序説』が、また小松和彦氏の『異人論』が出版されました。一九八六年には広川勝美氏が『犯しと異人』を、網野善彦氏は『異形の王権』を出されました。一九八七年には、山口昌男氏が『異人、河童、日本人』を、宮田登氏が『異人と妖怪』を出しておられます。一九八五年以降に出版されました研究書を読んでみますと、日本人研究者の間に新しい研究の関心が起こって、それが一種の流行となったことがわかります。そしてそれは、明らかに日本人が自分たちのまっただ中に来訪者が否定のしようもなく存在していることにあらためて気づいたことと無関係ではないと思われます。これらの刺激にみちた「異人」研究が、フォークロアや昔話、中世文学や江戸文学、あるいは社会学的、宗教的、心理的な側面などあらゆる方面からおこなわれていることからも、それは明らかです。

高まる「異人論」への関心

ところで、この異人に対する関心が、特にここ五年ほどの間に、どうしてこれほど急激に高まったのか、その原因を正確に見極めることはむつかしいでしょう。しかし、私は、何年か前に流行した「日本人論」の系譜を引き継ぐものではないかと考えるのです。その頃、日本人は取りつかれたかのように、日本人のアイデンティティについて議論したのです。日本人は、ユニークかつ同質的で、純血な単一民族であるのか否か、などの問題がさかんに議論されたのです。ところで、これほどまでに熱心に自らのことを議論したとなると、それに続いて、今度は自分たち以外の人々を論じたくなるのは、要するに、「私たち」を問題としたあとに、結局「彼ら」についての視点が出てきたということなのです。といいますのも、自分自身に関する客観的な理解は、

まさに、自らと他者との関係において、他者との比較によってのみ可能となるからです。

異人をめぐる議論は、近年、人類学者たちが、「内と外」「周辺」「閾」「境界」「外縁」「出入口」などの概念研究に没頭したことによって、火をつけられたともいえるようです。どちらにせよ、本日ここでは、日本人だけではなく来訪者自身にとっても興味があるだろうと思われる話題、つまり、定義上「来訪者」の一部である外国人に的をしぼって議論したいと考えています。私自身も「異人」の一人ですが、そういうことも参考にしながら、いくつかの日本の伝統的な来訪者概念について申し述べたいと思います。しかし、ここで皆様に、私の議論には、私自身「異人」であるという、逃れることも避けることもできない弱点がありますことを、頭の片隅においたうえで、話を聞いて頂きたいのです。といいますのは、今からお話します、色々な物語、そこに散りばめられている複雑な言葉の微妙な意味あいや、言葉の周辺や背後に隠されている意味の深さなど、私たち異人には理解できるはずがないのですから。

まず最初に問題になるのは、明らかに次の点です。すなわち、日本の伝統的な「異人」観は、日本独特かつ特別なものなのでしょうか。あるいは日本の「異人」観は、それ以外の文化に見られる来訪者の定義と何か共通したものをもっているのでしょうか。

日本と、それ以外の「来訪者」観との比較検討をすすめるにあたっては、幸いなことに、人類学者や古典学者による数多くの研究が蓄積されています。例えば、フレイザーは、『金枝篇』の「タブー」の巻で、来訪者への猜疑心を示す、つまり、来訪者というものは、未知の世界から見慣れない汚染や危険を持ち込むものだという多くの例を、様々な文化から取りあげています。来訪者に対してただちに示された反応は、侮蔑的な言動によって彼らを「追放」し、危険の侵入を回避するというものでした。しかし、訳あって、来訪者を受け入れなければならない場合には、その不吉な呪いの力を和らげ、力をそぐ手段が設けられており、そういう儀式の後にはじめて、来訪者は、その共同体において、危険人物とは見なされなくなるのでした。また、一九〇五年に書かれたゲオルク・ジンメルの有名な論文も、多くのことを教えています。ジンメルによると来訪者たちには「土地の所有」は決して許されませんでした。なぜなら土地は共同体の命綱であったからです。また彼らは、非常に客観的な態度をもっているために、闘争のよき審判者でもあるのですが、にもかかわらず彼らは共同体に何か具合いの悪いことがおこると、その責任を押しつけられてしまうことが多くありました。もし、疫病が流行でもすれば、ジプシーやユダヤ人がその原因に違いないと考えられたのでした。また、物価上昇、子供の行方不明、殺人事件などの場合には、誰でもいいから、まわりにいる「来訪者」をつかまえてきて、責任をなすりつけておけばよかったのです。

ジュリアン・ピット・リバースからも多くを教えられます。すなわち、私たちの中に混じり込んでいる来訪者たちは、まったく地位も権利ももっていないのです。彼らは、アウトローであり、「私たち」すべてが享受している法の保護を受けることなど期待できるはずもない

のです。しかし同時に、彼らは、薬草や自然の謎に関する神秘的な不思議な知識を身につけていたのです。彼らは、共同体にとって脅威的存在でしたが、しかしまた同時に、見たこともないような不思議な病気治療や秘薬の使用ができたのです。さらに、来訪者の対処の仕方には二種類あることを、申し上げたいと思います。まず第一に、彼らをいじめ追い払うことです。第二は、彼らをゲストとして迎え、秀でた人物として敬意をもって取り扱い、彼らの気持を和らげることです。要するに、ウチワとしての共同体は、来訪者を、「敵対者」から「主人」や「客人」に移し変えて受け容れるのです。結局、私たちは、A・M・ホーカートが指摘したこと、すなわちギリシア人は、主人と客人と旅人の区別をせず、三者に対して、同一の呼び名を用いたことを思いだすのです。

これらすべての研究から明らかになりますことは、来訪者の姿は両義的であること、すなわち、彼らは二つの側面をもつということです。彼らは、一見、気味の悪い、害悪を及ぼす恐れのある者でしょう。しかし、一方で、扱い方によっては、「私たち」の社会システムでは解決できない事柄にも援助と保護をさしのべてくれるのです。

ところで、日本の「異人」のイメージは、今述べましたこの異人モデルと一致するものでしょうか。このモデルと共通したものを、日本の中に見出すことができるでしょうか。それとも、日本特有の「異人」像があるのでしょうか。私のような外国人の心を打つ最初のポイントは、「異人」研究に役立つ資料の多さです。異人はよそものとか来訪者など、いろいろな形で、伝説、神話、民話に繰り返し繰り返し登場してくるではありませんか。同時に、その意味の広さも印象的です。おそらく、それらの意味を分析しようとするなら、次のような問いが役に立つのではないでしょうか。

来訪者たちのいる「外の世界」と、私たちに馴染みの深い内側の世界の境界は、一体どこにあるのでしょう。

来訪者の三つのタイプ

私には、この境界をどこに置くかによって、来訪者のタイプが三種に分けられるのではないかと思われます。私は、それらを、流民、外国人、そしておそらく「妖怪」と名付けてもいいかと思いますが、超越的な存在と呼びたいと思います。

まず第一の流民について述べます。日本には、江戸時代を通じて、家がなかったり、一年の大半を旅に明け暮れる流民や、旅人が驚くほど多くいたようです。それらの旅人の中には宗教的人物もあり、彼らの流浪生活は宗教的な願掛けに基づいてなされました。二、三の例を挙げますと、「念仏聖」、「熊野比丘尼」「歩き巫女」「行者」「座頭」「六部」などが、それにあたります。この他に流浪する職人もあり、木地屋や木彫師、また鋳物師や彫金師、皮革細工師や竹細工師などがそれにあたります。その他、演芸を見せるため、ツバメのように一年の決まった季節に定期的に各地を巡回する移動歌舞演芸師、俳優、軽業師、踊り子などがありました。陰陽師、傀儡師、猿廻しなどもこれにあたります。

これらの流民は、江戸時代を通じて「異人」と考えられていたよう

です。「定着」・定住の農業に対する「漂泊」または流浪は、しばしばいわゆる「非人」と揶揄されるほどに、「自分たちとは違う」種類の人々がすることだと考えられたのです。

この場合の「異人」のカテゴリーの境界は、定住して農業が営まれる農村であるように思われます。その村の中には、柳田國男が「常民」と呼ぶ普通の人々が生活していました。したがって、日本の各地から来る旅人は、「異人」とされたのです。

第二の「異人」のカテゴリーは外国人です。幕末期を通じて、横浜の町に初めて住みはじめたオランダ人、イギリス人、フランス人、ロシア人、ポルトガル人は、すべて「異人」と呼ばれており、また、この呼称は、明治、大正時代を通じて使われていたように思われます。実際、昨年の九月のことですが、私自身が通常の「外人」や「外国人」ではなく、「異人」と呼ばれているのを耳にしたのです。それほど、この「異人」という言葉は、今日でもなお用いられているに違いありません。

この場合、境界線は、単なる村でなく、日本全体を含めるため、外側におしひろげられたのです。したがって、日本の国のすべての人は、「私たち」であり、おそらく同質的人々の集まりと考えられます。よって、「私たち」の外の人間、他国者は「異人」であり、異民族なのです。

最後に、第三の意味における「異人」という言葉は、人類の外にある、「鬼」「河童」「山人」池や湖の「主(ぬし)」といった、私たちの心を魅惑する存在を意味します。柳田國男の『遠野物語』では、「異人」と呼ばれる人々は、「山人」として知られた、神秘に満ちた山男山女であり、彼らは山々の奥深くに住み、七尺八尺と極めて背が高く、毛むくじゃらで、眼はランランと輝き、会話はほとんどできなかったようです。柳田は、これらの、北日本全体に広がっている不思議な山男山女の物語は、日本列島にかつては住んでいたが、後に入ってきた人々によって山の奥深くに押し込められた、古い民族の生き残りをイメージ化したもの、と考えたのです。彼らはその結果、西欧では丘の凹地に住む西欧の妖精と同じように、不思議な、信じられないような人種へと後退したのです。一部の学者は、これを、古代の前インド・ヨーロッパ語族の生き残りとさえ考えているようです。

岡正雄氏は、彼の初期の論文「異人その他」に、西日本で、蛇や竜と考えられていた池や湖の「主(ぬし)」が、どうして「異人」と呼ばれていたかを示しています。「椀貸し伝説(わんかしでんせつ)」によれば、結婚式のために膳や椀を借りたいと願うどんな家族にも、親切にそれらを貸し与えるのは、また池に住む「異人」でした。もし人々が椀を割ったり、元の数の物を返さなかったときには二度と再び貸してはくれなくなってしまいました。しかし柳田は、つい今世紀の初めに、北日本や西日本で、主(ぬし)や「異人」からもらった、記念の赤漆の椀を誇らしく保存していた家族に出会っています。

この場合、境界はさらに遠くに押し広げられており、境界の内側には私たちが人類と呼ぶものがすべて包み込まれています。この境界の外のものは、人類には含まれず、超自然的なものと考えられたのです。多くの場合、それらは多分に慈悲に富んでいますが、人間というより、

他の世界、他の秩序に属しているには違いありません。「妖怪」という言葉が、おそらく当てはまると思いますが、英語の「怪物＝モンスター」は、少し意味が強すぎるかもしれません。

以上で、「異人」という一つの言葉に包み込まれている、明確に異なった三種のタイプの存在が、示されたと思います。すなわち、第一は、定まった家をもたない流民、第二は、日本の国の外に住む外国人、第三は人間の世界の外にいる様々な超自然的な存在です。

豊富な民間伝承をさぐると

さて、ここで、話を進めて、これらの様々な来訪者が、日本の民間伝承で、どういう取り扱いを受けているか考えてみましょう。この点では、ジュリアン・ピット・リバースがギリシアに関して発見したのと同じ区分法をあてはめることができるでしょう。第一は、侮蔑して、来訪者を追い払うこと、第二は、ゲストに当然与えられるべき名誉を与え、来訪者を親切に迎えることでした。

しかし、伝説や民話にあるすべての物語が指摘しています教訓は、来訪者の追放という第一の選択は良くないことで、不運を招くということです。皆さんが、来訪者を追い払うなら、あるいは侮蔑し、殺すことなどあれば、不幸がやってくるのです。収穫はなくなり、子たちが死に、家族がバラバラになるのです。なぜでしょうか。来訪者は、一見、気味の悪い、醜い乞食に見えても、実際はそうではないからです。彼らは、身をやつしていますが、実は高貴な人物で、ときには神が別の姿をとっていることもあり、心のこもったもてなしを受けたときには祝福を与え、無作法な扱いをうけたときには呪いをもって報いるのです。

身を変えて日本各地を渡り歩く異人の伝説は、特別に興味深いもので、柳田國男は、彼の「史料としての傳説」で、その価格にもかかわらず見過ごされている、貴重な歴史資料と述べています。それは、民間伝承のすべてに共通な暗号としての比喩的表現をとった、過去から受け継がれてきた重要な遺産であり、その暗号が解読され理解されるなら、未知の過去に光が当てられるのです。柳田は、それらの膨大な数の伝説を集め、分類し編集し、それは『日本傳説名彙』という名で出版されています。

この本では、日本全国至る所に、半ば神聖なものとされた木や石、池や井戸があったことを知ることができます。そういった場所や物は、昔、貴人が旅の途中で一服したという類の話にいろどられています。貴人が、その木の下に座り、その枝に馬を繋ぎ、箸を地面に差しこむと途端にそれが根づき、たちまちにして大木に育ったのです。日本のどこに行っても、そのような場所は、同じ名で呼ばれています。貴人が腰掛けた松の木は、「腰掛松」と呼ばれ、馬を繋いだ杉の木は、「駒繋杉」と呼びならわされています。木や岩や池は、そのそばを貴人がちょっと通り過ぎただけで、神聖視されるようになったのです。

ところで、これらの貴人とは一体誰だったのでしょうか。伝説は、彼らを様々な名で呼んでいますが、ほんの少し検討しただけでも、明らかに四つのタイプに分けられます。

第一のタイプは、宮廷から追放され、住む家もなく、貧しく流罪の

身となった天皇や親王です。たとえば、壇の浦の戦いで溺れ死ぬこともなく、何年間も人里離れた山々や島々に逃れ、渡り歩かれた安徳天皇の物語は、四国や九州、また日本海沿岸のあちこちに見られます。以仁王もまた、宇治橋の合戦で戦死されたのではなく、『平家物語』の語るところによると、会津若松方面に逃れられました。この地方には、そのときの遺跡が詩や謡、あるいは伝説となって今日まで伝えられています。同じく、惟喬親王の流浪の旅は、愛知川（えちがわ）までその跡をたどることができ、彼は最後には木地屋という職人の地に落ち着いたのでした。ここには、流罪となった王、「流され王」が登場します。柳田國男はこれらの人々についても論文を書いていますが、彼らは今日でも非常に興味深い研究の主題となっています。ともかく彼らは、他人の罪を背負ったスケープ・ゴートとして流罪になった犠牲者、「身代わり」というだけだったのでしょうか。しかし、それらの物語すべてには、この流され王を親切に迎える話が出て参ります。その結果、たとえば惟喬親王は木地屋に轆轤を教えました。このように、彼らは祝福を与え、技芸を伝えることによって好意にこたえたのだと言い伝えられています。

流浪の貴人の第二のタイプは、合戦に負けて追手から逃れる落武者です。このタイプに属する話は、たいてい平家の「落人」に関するもので、日本各地に残されています。各地で、落人は、しばしば山奥の木挽きや炭焼きを生業とする村に落ち着き、その孤立した村の先祖となったのです。この地でも、落人への親切な取り扱いは、その見返りとして、名門の血を受け継ぐという名誉を与えられました。そして、この先祖は、人々に、今日までも何世代にもわたり受け継がれてきた特殊技能や、魔除けの護符を与えたのです。

第三タイプの流動する貴人は、女人です。彼女たちは、かつては美しく、また和歌や謡物を作る才能に恵まれていたのです。しかし、いまや年老い、醜い姿となり、貧しいのです。彼女たちは、その通った跡に、立派に生長した木々や花々を残しながら各地を旅して歩きました。そして彼女たちが歩いた地は、かつてはずばぬけていた彼女の魔術的な詩作力を通して、そこでつくられた和歌とともに「歌枕」として記憶されているのです。

さて、旅人にもてなしを勧める物語と最も明確に結びついているのは、第四のタイプ、すなわち流浪の高僧あるいは傑僧であります。彼らは、乞食に身をやつして日本各地を漂泊しました。このタイプの代表は言うまでもなく弘法大師で、このためこの種の伝説は弘法伝説として知られるようになりました。この伝説物語によれば、醜い姿の乞食僧が、乏しい飲み水しかない村里を訪ね、村の女に一杯の水を所望します。するとその女は、親切にも、乞食僧が求めた飲み水を汲みに遠くまで出掛けていくのです。乞食僧は、それを飲み、それから自分の杖を地面に差し込みます。すると途端に、そこから清水が涌き出るのでした。こうしてその村は、それ以来ずっと豊かな生活を送ることができたのでした。「弘法の清水」伝説は、柳田の伝説リストによれば、日本のほとんどの地方に見受けられます。

それから、乞食僧が今度は他の村を通りかかります。そこでは、以前から豊かな涌き水が出ていました。ここでも、乞食僧は村の女に水

を一杯所望します。ところが女はまったくの怠けもので、水を汲みに行きませんでした。そこで乞食僧が、自分の杖を地面に差込みますと、途端にその水はすっぱくて飲めなくなってしまいました。

「弘法伝説」には、この他にもいくつかのタイプがありまして、乞食僧が魔力で水を与えるのでなく、一年に三度も豊かに実を付ける栗の木や、見たこともないような大きさの桃や柿の実を付ける木を与えるという話があります。もちろんけちで怠惰な村では、乞食僧は、栗や桃の実を食べられないほど固くされたそうです。

このように弘法伝説は、旅人がたとえ醜く、薄汚く見えても、彼らをどう処遇すべきかという、豊かな道徳的教訓を含んだ、非常に完成度の高い物語なのです。これらの物語は、明らかに、きわめて古いものです。農業が行われる前の時代に起源を遡ることさえできましょう。といいますのも、乞食のような旅人によって祝福が与えられるという話には、穀物がまったくでてこないからです。ただ水や果物や木の実だけが、また時に魚が奇跡的に登場するにすぎないのです。この伝説の起源がかなり古いことを想い起こしますと、同じような教訓物語が、今日でもなお、四国の遍路道に沿ってあちこちに残っているのは、実に興味深いことです。お遍路さんも、来訪者の一種と見なすことができます。彼らも、ある意味で流浪の民であり、このために「異人」のうちに含められるでしょう。お遍路さんが、四国八十八カ所を通過するとき、彼らには無償の食べ物や宿が提供されますが、こういった「接待」やもてなしの習慣は、確かに弘法伝説と結びついているのです。なぜあなたは、お遍路さんに無償で食べ物や宿泊所を提供するのですかと尋ねたら、彼らは、お遍路さんは誰でも、弘法大師が身を変えておられるのであり、それだけにお遍路さんすべてに親切にすべきなのです、という答えが返ってくるでしょう。

流浪の「貴人」とは誰か

以上のように、流浪の貴人伝説は、どのタイプを見ても、旅人が貧しい姿に身をやつして来訪します。親王は、流罪となり家もなく、極貧の姿からして彼の王位など微塵も想像できません。同様に、落武者は合戦に敗れ、追手に追われて敗走しており、彼本来の高貴な姿など見当もつきません。かつては美貌に溢れ、魔力にとりつかれたかのように次々と謡物や和歌を作っていた女人も、同様に今や年老いて醜い姿となり、かつての姿など想像もつかないのです。高僧もまた乞食の姿に身をやつして来訪します。こうした姿は、「来訪者」の多義性を表現するための道具だてとは、考えられないでしょうか。といいますのも、このような矛盾に満ちた存在は、日常の、事実を現すための言葉や、直線的な想像力では表現することが難しいだろうと考えられるからです。

しかし、これら高貴な、半ば神聖な流浪者に、何らかの古き原型が存在していたことはまちがいないでしょう。つまり、流浪者の物語は、安徳天皇や平家の落人、和泉式部や弘法大師よりも前にすでに存在していた、ある共通した原資料に由来しているに違いないのです。折口信夫は、貴人の流浪者像が伝説や文学にたびたび登場していることを発見し、古代の忘れられた神話に彼らの起源があるに違いないと考え

ました。それは場合によっては、あの世からこの世へと降りてくる、古代の名もない「神」であったかもしれません。もちろん、その「神」は、正しい儀礼と捧げものによってふさわしく迎えられたなら、祝福を授け、反対に無作法に扱われたなら、呪いをもって応える用意ができていたのではないでしょうか。

折口の、「客人」に関する理論は、日本の伝説や文学にたびたび登場する流浪の貴人像について、最も適切な説明であるように思われます。しかし、どこの国にも、身を変えて私たちを訪れる、位の高い、神聖な人物についての話がそう流布しているのではありません。確かに北ヨーロッパには、キリストが身を変えてある村を訪問され、村のパン屋の娘にパンをいくつか所望されたというキリスト伝説があったようです。パン屋の娘は余りにもけちで、キリストにひときれのパンさえ与えなかったために、キリストはその娘を裁かれ、フクロウに変えてしまわれたというのです。これは、『ハムレット』の中の、気が狂ったオフェリアについての有名な言葉、「フクロウは、パン屋の娘だったそうだ」の起源となっています。しかし、これらのキリストの物語は、とうの昔に忘れられてしまい、オフェリアの言葉は、何世紀もの間、気の狂った人物が発したうわ言にすぎないと考えられていました。それらの言葉が、シェイクスピアの時代に流布していた民話に基づいていることは、最近になるまで分かっていなかったのです。

ところが、日本における伝説は、今日も全国どこにでも見られ、記憶され、また伝説に語られている地が今なお名所とされているのです。「弘法の清水」の涌き水は、今日でもいたるところに残っており、驚くほどたくさんの実がなる栗の木についても同じことがいえます。

来訪者の原型は、今日なお和歌や伝説や夢に生気を吹き込んでいる日本の文化の深層をなしているように思われます。すなわち、他の国々ではすでに忘れ去られてしまい、思い起こすことのできない文化の深層が、日本ではなお生き生きと随所に見られるのです。日本には、インドラの網の、相互に混ざりあいながら連結した宝玉のように、シンボルのネットワークが存在しているように思われます。そして、それは今日もなお呼び出すことができるのです。これらのシンボルは、繰り返し繰り返し、伝説や劇、和歌や個人の夢に登場します。しかも、それらのシンボルには不思議な力がしみ込んでおり、長く忘れられていた暗号における隠された意味の深層を暗示しているように思われます。来訪者のシンボルもそれらのシンボルの一つではないでしょうか。

想像的な境界線の存在

この講演をしめくくるにあたり、わたしたちの最初の質問に戻りたいと思います。すなわち、日本の来訪者のイメージはとにかく日本独特であり、他の文化がもつそのイメージと異なっているのでしょうか。吉田禎吾氏は、否と答えています。吉田氏は、日本の来訪者イメージの特徴である多義性または両面価値性は、世界中どこにでも見られるように思われる、と書いています。敵にも救い主にもなる来訪者は、人間の心の奥深くにある、神話的原型に違いないのです。来訪者の本質は、文化の違いによって決定されるものではないのです。

そして、一方では弘法伝説の豊かな遺産や高徳の乞食を思い浮かべ、

他方では、聖パウロが「ヘブライ人への手紙」に書いた「旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、気づかずに天使たちをもてなしました」という言葉を忘れないで頂きたいのです。来訪者たちには、親切であるように注意しようではありませんか。といいますのも、彼らは、身を変えた天使かもしれないのです。聖パウロは、このような思想を、「玄関先でいつも温かく旅人をもてなしなさい」というユダヤ人の古い伝統から学んだようです。なぜなら、変装してやって来る旅人は、場合によっては救い主の先駆者エリヤかもしれなかったからです。したがって過ぎ越しの祭りの時には、そのエリヤのために一杯のぶどう酒と椅子が用意され、子供たちは、身をやつしたエリヤが家の前を通りすぎるのではないかと、戸口までいって目をこらして通行人を見守ったのです。また、オデュセウスは、長い放浪冒険の末、故郷の地に誰とも区別できないような姿に身をやつして帰郷しました。その時、彼の家人の一人が、「旅人は神が身を変えられたのかもしれないので、辱められるべきでないのです」と注意したことを、ホメロスはしっかりと書きとめています。

おそらく、あらゆる文化には、必ずしもはっきりとは意識されていないにせよ、幾重にもおり重なった境界線が存在します。そして、たとえば、ある境界線にしたがえば、男と女は「同じ側」に属するのではなく、「我」と「他者」として向い合っているのかも知れません。エドワード・サーイードは、西洋と東洋の境界を画定しようとするなら、『イリアス』にまで遡ることになり、それは、ボスボラス海峡あたりになるのではないか、と言い切っています。一方の側にはギリシア人が、他方にはペルシア人が住んでいます。そして、ペルシア帝国から東へと手を伸ばそうとするものはすべて、未知になる「想像の地理学」の領域へと入って行くことになるのです。

もしこの想像的な境界がなかったら、世界はなんと単調で退屈なものになることでしょうか。まさに詩歌の素材でもある、イメージの豊かな源泉は破壊されてしまうことになるでしょう。そこでは、スフィンクス、プレスター＝ジョン、イシスとオシリス、壮麗なバビロンの都－これらすべては消え去ってしまいます。そのような世界では、戦いによる廃墟は消し去られ、生活水準の統計資料や人種関係団体が発行する「手引き書」が幅をきかせるようになるでしょう。「固定観念（ステレオタイプ）を打ち壊す」という名目で、遠いかなたのイメージや神話を見捨てないでいただきたいのです。さもないと、私たちは、ルネ・グノンが「量の支配」と呼んだものの統治下に、実のところ押し潰されてしまうことになるでしょう。だからといって、私たちは、心や霊の生活に必要な豊かな想像力をもった神話の世界と、私たちの家の玄関に立っている来訪者が怪物でも救い主でもなく、私たちと同じような一人の男や女であるような現実の世界とを、見分けることができないとは、決して思えないのです。

（訳　村田充八・柏岡富英）